

博物館だより

NO.28

SUITA CITY MUSEUM

平成18年(2006年)度 実験展示

「さわる 五感の挑戦 PART I」

平成18年9月16日(土) ~ 10月15日(日)



張子のお面

「みる」、「きく」、「さわる」、「かぐ」、「あじわう」。これらによって得られる感覚を五感といいます。五感は、日常生活のあらゆる場面で働いていますが、いつでもどこでも同じバランスで働いているわけではありません。コンサートでは、音楽を「きく」こと、またレストランでは、料理を「かき」、「あじわう」ことが大きな比重を占めます。それでは博物館ではどうでしょうか。

博物館で展示される資料の多くは展示ケースのなかに入っており、ガラス越しに目で「みる」

ことがほとんどです。貴重な歴史資料や美術品を保護するためには、こうした展示法はやむをえないことですが、「みる」だけの鑑賞では、得られる情報に限りがあります。

「さわる 五感の挑戦 PART I」は、手でさわることで、物の質感や形、大きさを触覚でとらえ、そこからどんな情報や感動が得られるかを見直そうという実験展示です。今回はその1回目ですが、五感の豊かな世界を体感していただける展示をめざして今後も工夫していきたいと思います。(小山修三)

広瀬浩二郎 さわる展示と触文化を語る

現在国立民族学博物館で開催されている「さわる文字 さわる世界」展（平成18年3月9日～9月26日）は、展示資料をさわって鑑賞しようという画期的な展示です。この展示を企画された広瀬浩二郎氏（同館民族文化研究部助手）には、当館の「さわる 五感の挑戦 PART 」にもアドバイザーとして協力していただいています。広瀬氏に、さわる展示と触文化について語ってもらいました。



広瀬浩二郎

昭和42年生まれ。
京都大学卒業。
文学博士。
平成13年から現職。
専門は日本宗教史、
障害者文化論。

- 民博の「さわる文字 さわる世界」展は、すべて資料をさわれるという画期的な展示で、博物館関係者が注目しています。この展示のねらいについて教えていただけますか。

広瀬：ねらいは大きく2つあります。1つは僕自身も全盲なのですが、視覚障害者の人を意識した展示だということです。今までの博物館はどうしても見るのが中心だったので、視覚障害者は最も博物館から遠くにいた人たちであったわけです。そういう人たちに来てもらうためには、さわって楽しむということが一番だと思います。もう1つは、五感といわれるように視覚のほかに4つの感覚がありますが、目が見えると他の四感を使うことがおそれるのではないかと思うんです。でも実はさわってみると楽しいし、さわらないとわからないこともたくさんあるわけで、普段忘れていた触覚の楽しさに気づいていただくということが2つ目のねらいです。

- 博物館は、「見て得た」情報を知識とするわけですが、どうしても観念的になりがちな気がします。そこでさわるということで、理解の仕方も変わってくるのではないかと思います。

広瀬：そうですね。今回は明治時代に盲学校で使われていた古い凸文字教科書をだしています。とてもきれいに字が浮き出していて美しいものなのですが、手にとって頁をめくってみると、

両面はりあわせてあったり、まんなかの薄い紙が入っていたりします。そういうのを実際にさわると、それを作った職人さんの苦労とか工夫や情熱、一生懸命それをさわって読んでいた人たちのことなどなど、見る以上にさわった手から伝わってきますよね。

- 先生は、日本の歴史のなかで視覚障害者の果たした役割を研究されていらっしゃると思いますが、今回の展示とご自身のこれまでの研究とは、どう結びついているのでしょうか。

広瀬：今回は点字以前のいろんな文字もだしています。たしかに点字がない時代は目の見えない人たちは苦労して、文字を一生懸命さわって読まなければならなかったのか、たいへんだなという感想が1つあると思います。もう1つ、触覚の力をフルに活用していたんだと考え、「すごい」という見方もできます。「たいへんだな」という面と「すごいな」という面を単純に感じてほしいと思います。それは障害者の歴史、盲人史を追ってみても感じます。

たとえば今回の展覧会とは直接関係ないんですが、かつて琵琶法師^{びわほうし}とかイタコと呼ばれる人たちがいました。琵琶法師は、記憶によってあの膨大な平家物語という語り物を作り上げていて、脈々と師匠から弟子へと伝えてきました。イタコは死者の霊魂という、普通の人は目に見えない世界を一生懸命修行することによって感

じる。それは信仰の世界ですから信じる人、信じない人がいるわけですが、自分たちは特別な修行をして靈魂の世界を感じることができるんだと、プライドと自信をもってイタコという職業を脈々と受け継いできた。そういう人たちの生き方に「すごさ」を感じるわけです。

- さわるということと見るということは具体的にどう違うのでしょうか。

広瀬：キーワードとして僕はよく「創る」って言葉を使うんです。視覚は、「^{いちもくりょうぜん}一目瞭然」って言葉がありますけど、ぱっと見ただけでいろんな情報が入ってくる。それに対して触覚は、ただかだか手の平の10cm四方くらいの大きさでしか情報は入ってこない。つまり点でしか情報は入ってこないんです。だから情報量としてはたちうちできないのですが、視覚より劣っているという話ではなくて、質が違うわけです。触覚の場合は確かに点なんだけど、手を動かすことによって点だった情報を線にし、面にして、さらに立体にしていく。手で情報を広げていく。それが触覚の面白さだし、人間らしい知的な営みだと思うんです。二つの想像（創造）力、イメージーションとクリエーションを強調するんですが、想像（創造）力を働かせて、イメージをふくらませていくという作業が、さわることの特徴だし可能性なんでしょうね。

- さわることは、イメージーション、クリエーションを働かせる知的作業だというのは面白いですね。

広瀬：ええ。だからキャプションでも解説でもあまり書かずに、必要最小限にしているいろいろ考えてもらうってほうが展覧会としては面白い。

- 大人はつい言葉でまとめてしまします。さわることで情報として整理していくのは、若い人たちやお子さんのほうがより自由にできるのかなと思います。さわる展示の今後の展望についてお話しいただけますか。

広瀬：今回「さわる文字 さわる世界」展を、いろんな方に見ていただいてある程度評価をし

ていただきました。今回の展覧会は、物をすべて解説を書いて、その物が見るだけでなくさわるということで、展示の仕方としては非常にオーソドックスな形におちついてしまったと思うんです。だから次回はもっと遊びの要素を入れてみたいですね。全体的な展望でいえば、たまたま僕の展示が終わろうとするタイミングで、吹田市博の展覧会も始まりますし、点で行われていた活動が線になり面になって、だんだん全国でもネットワークができ、いろいろ情報交換していければ可能性は広がると思います。

- 触覚だけでなく他の要素を入れるということは考えていませんか。

広瀬：今回は触覚だけだったのですが、五感ということを見ると、匂いとか、音なんかも入ってくるわけで、そのあたりにも注目して面白い展示をしてみたいと思います。でも味覚はちょっと難しいでしょうね。

- 吹田市博のさわる展示では、和楽器のコーナーと仏像レプリカのコーナーがあります。和楽器のコーナーは音色を聞くという聴覚の要素を取り入れています。仏像レプリカは樹脂でできていて質感は味わえないので、仏像の材として使われた[■]檀や[■]樟、[■]榿、[■]桂などの木材を置いて手触りや香りを楽しんでもらおうと考えています。

広瀬：楽器はいいですよ。民博の常設展でも一番人気があるのは楽器です。ガムランなんか子どもから大人までやっていますし、視覚障害の方が来たら必ず「ガムランはたたけるから」ってすすめているんです。ユニバーサル・ミュージアムって言葉がありますが、これからの博物館は誰もが楽しめるということで、いろんな人がごちゃごちゃ来ていて、そのなかに白い杖をもった人もいるし、手話を使っている人もいます。そんな光景が普通になることが目標です。

- 本当にそうですね。広瀬先生の思いやメッセージは今後も多くの方々に伝わっていくと思います。どうもありがとうございました。

（インタビュー：滝沢幸恵）

展示を楽しむ鑑賞のポイント

「さわる」展は、小さなお子様からご年配の方、また視覚など障害をおもちの方も、誰もが楽しめる展示にしたいと企画されました。モノを心ゆくまで手でさわること、そこから生まれる発見と感動がこの展示の醍醐味といえるでしょう。ここでは、展示の構成と各コーナーごとの鑑賞のポイントをご紹介します。

玩具



張子のお面をつけて

むかしながらの玩具には温もりと安らぎがあります。素朴な玩具には、私たち先祖の知恵と工夫とユーモアがこめられています。

ポイント

その1 質感を楽しむ

玩具の材料となっているのは、木や粘土、和紙、綿・麻などの繊維といった自然素材です。自然の風合いと素材の質感を感じとりましょう。

その2 形をたどる

玩具の形は一つ一つ違ってきます。手にとって、指先でその形をたどって、どんな特徴があるかみつけてみましょう。

その3 遊ぶ

玩具のなかには独楽やでんでん太鼓、南京玉すだれ、手まりなど、動かして遊ぶものがあります。遊ぶことで、玩具に命が吹きこまれます。まずは遊んでみましょう。



伏見土人形

和楽器

美しい旋律とリズムを生み出す和楽器。その音色と響きはわたしたちの心をゆさぶる不思議な力があります。

ポイント

その1 音を出す、音を聞く

和楽器には、琴や三味線などの弦楽器、笛や尺八などの管楽器、太鼓などの打楽器があります。また、鈴や拍子木やささらなど、ふったり、叩きあわせたり、こすったりして音を



簞簾・龍笛・手拍子（左から）



三味線をひく

出すものもあります。自分で音を出してみて、その音色に耳を傾けてみましょう。

その2 材質・構造・形状を知る

音の出るしくみや音質は、和楽器の種類により異なります。音をだしてみたら、それぞれの和楽器がどんな材料でできているか、その構造や形はどうなっているかを手にとって確かめてみましょう。

仏像レプリカ

仏像は仏の姿を造形化したものです。表現の仕方は時代によってさまざまな特徴がありますが、いずれも仏教の真髄である“慈悲”の心が表現されています。

ポイント

その1 形の特徴を見つける

仏像は、人間の姿に似ていますが、人間とは異なるいくつかの特徴が表現されています。仏像の頭のとっぺんから足もとまで、指先や手の平を使って丹念にたどってみましょう。何気なく見ているだけでは気づかなかった発見があるでしょう。

その2 形にあらわされた意味を知る

仏像特有の形には、歴史的、信仰的な意味があり、それがわかると仏像への理解は一層深まります。仏像の形で疑問に思ったこと、不思議に感じたことはなんでも質問してください。



雲中供養菩薩像レプリカ

(滝沢幸恵)

展示関連イベントのご案内

○ 博物館トーク

9月17日(日) 午後2時～3時

「触覚鑑賞へのいざない」

- 仏像・和楽器・玩具 -

当館学芸員 滝沢幸恵

○ 和太鼓演奏会

10月15日(日) 午後2時～3時

「心に響くふるさとの音」

演奏 郷土サークル野火

申し込み不要。博物館3階横広場。

当日直接会場へ。

○ 講演会

10月1日(日) 午後2時～4時

「ひらけ豊かな触生活！」

国立民族学博物館民族文化研究部助手

広瀬浩二郎氏

講演会のあと当館館長小山修三とのフリートークがあります。

博物館トーク・講演会とも申し込み不要。博物館講座室。定員120名。先着順。当日直接会場へ。

「摂津国」ができるまで

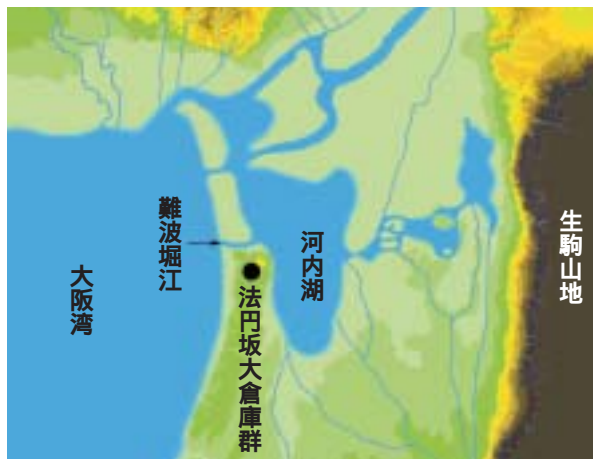
摂津国は、東は現在の大阪府島本町から西は神戸市須磨区にわたり、北は大阪府能勢町など北摂山地を含み、南は古代に難波なにわといわれた大阪市ほぼ全域をその領域としています。「摂津」とは津（港のこと）を管理するという意味で、その津とは難波津なにわづのことです。奈良時代、摂津国の内政は、港や船舶に関わることをも掌る摂津職しきという機関が兼ねていました。

約6,000年前の縄文海進により大阪平野の大部分は海の底となりました。これを河内湾といいます。その後海面は低下していき、上町台地の北には細長い砂州（天満砂堆）が延びていきます。また、千里丘陵の南端には吹田砂堆ができ、この2つの砂堆の間が、自然地形では大阪湾と河内湾を繋ぐ唯一の開口部となっていました。

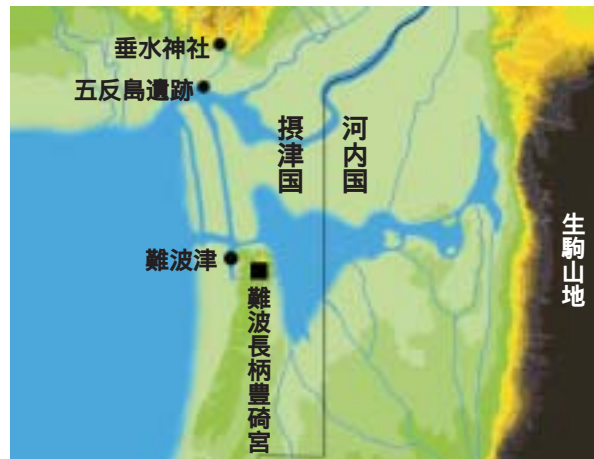
5世紀頃には河川の堆積作用と渡来人の灌漑^{かんがい}技術による開発で陸化が進み、河内湾は潟湖（河内湖）となり、周辺は広大な低湿地となっていました。しかし、十分な排水機能を持たない河内湖では、一度長雨や豪雨になれば水位は上昇し、沿岸は氾濫^{はんらん}の危険にさらされていました。そのため、5世紀後半頃、上町台地の北で天満砂堆を切り、湖に滞留^{たいりゅう}した水を排出できるようにしました。これが「難波堀江^{なにわのほりえ}」で『日本書紀』には仁徳天皇の事績として伝えられています。

難波堀江の開削によって難波津は大きく発展しました。上町台地北端で発掘された5世紀後半頃の法円坂大倉庫群は難波津に集積した物資を収めたところと考えられています。6～7世紀には外交使節のための迎賓館が整備され、遣隋使や遣唐使も難波津から出航するなど国際的に重要な港となっていきました。こうした港湾施設を管理するため、河内湖周辺の大豪族である凡河内直氏の勢力範囲であった河内国の一部を割いて置かれたのが摂津国なのです（このときの国名は「津国」）。武明天皇13年（684）に諸国の堺が定められ、冒頭の摂津国の領域はこのときに区画されますが、摂津国と河内国との境が淀川以南で直線となっていることから両国の分離が政治的な事情であることがうかがえます。

白雉3年(652)頃、都は難波^な長柄^が枳^ら田^{とよさきのみや}宮^{のみ}(前期難波宮)に遷^{うつ}されました。吹田では、垂水公^{たるみのきみ}が垂水神社^{ちんざ}の鎮座^{おかもと}する垂水岡^{たか}基^みから難波宮へ高樋^ひを通したという伝承があり、五反島遺跡では難波宮下層出土土器とよく似た様相の土器群が出土するなど、この頃から難波地域と深い関わりを持つようになりました。摂津国の領域が決められた背景には、地形の発達とともに難波地域とその北方の地域がまとまりを持ち始めたことがあるのかもしれません。(高橋真希)



5世紀頃の大阪平野
(海岸線の復元は梶山彦太郎・市川実『続大阪平野発達史』による)



6～7世紀頃の大阪平野
(海岸線・難波津の復元は日下雅義『河内平野の変化をたどる』による)



百人一首

百人一首は、だれもが一度は百人一首カルタで遊んだり、学校で学習したことのある素材だろうと思います。すべての和歌を覚えていなくても、なんとなく一部のフレーズを覚えていませんか。そういう耳慣れた言葉が一部でも分れば、読むことができるのではないのでしょうか。

昔の文字を読むとき、漢字のくずし字を読むこともむずかしいのですが、それ以上にむずかしいのが仮名でしょう。江戸時代、平仮名には一つの音に対して多数の字体がありました。たとえば、「い」は「以」「伊」「意」、「ろ」は「呂」「路」「露」、「は」は「波」「者」「盤」などの漢字を元とする平仮名があったのです。しかし、明治33年(1900)小学校令施行規則により、「ゐ」や「ゑ」を含みますが、ほぼ現行の字体が平仮名に採用され、その他の字体は変体仮名とされました。さらに、昭和21年(1946)の改定により現行の仮名づかいに改められ、「ゐ」や「ゑ」も使われなくなり、現在では変体仮名を目にすることはほとんどありません。そのため、私たちが昔の文字を読むためには、変体仮名に親しむことが必要となります。

では、百人一首のカルタを読んでみましょう。写真は、百人一首の絵札で、上の句が書かれています。右はこしきぶのないし小式部内侍の「大江山幾野のみちの遠ければ(ば)(まだふみもみず天の橋立)」、左はありはらのなりひら在原業平朝臣の「千早振神代もちきかず(ず) 竜田川(からくれなゐに水くくるとは)」です。江戸以

前の表記では濁点はないことも多く、また、「幾野」のような当て字も多いです。大江山や竜田川などキーワードが読めれば、「ああ、あの句か」と思い出す人もいるでしょう。「みちの遠ければ」「きかず」の「の」「け」「は」「か」「す」は変体仮名ですが、歌を知っていれば見当をつけることができます。ちなみにそれぞれ元の漢字は「能」「介」「八」「可」「須」です。はじめて出くればとまどいますが、それぞれ形を覚えておけば、他で出てきたときにも読むことができます。そうして、一字一字読める字を増やしていけばいいのです。

ところで、『どうけ百人一首』という江戸時代に刊行された百人一首のこっけいほん滑稽本があります。かきのもとひとまる柿本人麿 親類の産に女房をてつだはせながらし夜をひとりかもねむ」、「やまべのあかひと山辺赤人 焼芋のみせびらきするその頃はふじの高嶺たかねに雪はふりつゝ」など、元の句を拝借した言葉遊びです。元々和歌は本歌取りなど、古い和歌を知っていることが前提となっていますが、この本はそれほど高尚なものではなく、庶民の感覚で詠んでいます。

今秋の「昔の文字を読む」展(10月21日(土)~12月3日(日))では、絵巻物などをご紹介します。昔の文字に親しんで、読んでみませんか。

(池田直子)



どうけ百人一首

催し物のご案内

平成18年度 秋季特別陳列

「昔の文字を読む」関連イベント

講演会

11月12日(日) 午後2時～3時30分

「日本人と漢字」

京都大学大学院人間・環境学研究科教授

阿辻哲次氏

11月19日(日) 午後2時～3時30分

「マヤから文字を見る 文字の本質を考える」

国立民族学博物館教授 八杉佳穂氏

11月26日(日) 午後2時～3時30分

「文字と記号 アボリジニの絵画から」

当館館長 小山修三

申し込み不要。博物館講座室。定員120名。先着順。当日直接会場へ。

展示解説

11月4日(土) 午後2時～ 当館学芸員 池田直子
申し込み不要。博物館特別展示室。当日直接会場へ。
観覧料が必要。

古文書学入門講座

10月21日(土) 午後2時～3時30分

「近世文書を知る 三行半」

当館学芸員 田口泰久

11月11日(土) 午後2時～3時30分

「近世文書を知る 起請文」

当館学芸員 田口泰久

11月25日(土) 午後2時～3時30分

「中世文書を知る 花押」

当館学芸員 池田直子

12月2日(土) 午後2時～3時30分

「中世文書を知る 頼朝と御家人」

当館学芸員 池田直子

申し込み不要。博物館講座室。定員120名。先着順。当日直接会場へ。

体験講座

10月22日(日) 午前10時～午後2時30分

「カルタ作りとカルタ大会」

小学生対象。午前中はカルタ作り、午後は作ったカルタでカルタ大会を行います。片方のみの参加もできます。

博物館講座室。用紙は博物館で用意。クレヨン・絵の具などは各自持参してください。午前・午後とも参加される方は昼食を持参してください。

11月3日(祝) 午後1時30分～午後4時

「旧吹田の石ぶみをみてあるく」

吹田郷土史研究会 加賀真砂子氏

旧吹田の道標などを見学します。

11月23日(祝) 午後2時～4時

「大人のための書道教室 - 変体仮名を学ぶ - 」

(社)日本書芸院二科審査員 瀧聴葉氏

変体仮名を学習し、和歌を書きます。

博物館講座室。書道用具(筆・硯・下敷等)・半紙は各自持参してください。

いずれも申し込みが必要。・は定員30名。多数抽選。申し込みは、住所・氏名・年齢・電話番号を明記して、ハガキ、またはFAXで同館へ。締め切りは、10月12日(木) 10月17日(火) 11月7日(火) 必着。

トーク&ワークショップ

12月3日(日) 午後2時～4時

「くさび形文字で名前をかこう」

総合地球環境学研究所上級研究員 森若葉氏

くさび形文字についてのお話と、粘土板にくさび形文字で自分の名前を書き付けるワークショップを行います。

博物館講座室。定員50名。多数抽選。申し込みは、住所・氏名・年齢・電話番号を明記して、ハガキ、またはFAXで同館へ。11月23日(祝) 必着。

歴史講座

9月23日(土) 午後2時～3時30分

「砂持ち神事」

当館学芸員 藤井裕之

9月30日(土) 午後2時～3時30分

「西尾家住宅にみる近代化」

当館学芸員 藤原 学

10月7日(土) 午後2時～3時30分

「上方落語にみる大坂庶民 - 『らくだ』を題材に - 」

当館学芸員 田口泰久

博物館トーク

10月14日(土) 午後2時～3時

「吹田の建物疎開について」

当館学芸員 田口泰久

11月18日(土) 午後2時～3時

「考古資料にあらわれた陶工・瓦工たち」

当館学芸員 藤原 学

12月17日(日) 午後2時～3時

「井戸の考古学」

当館学芸員 高橋真希

1月21日(日) 午後2時～3時

「七福神にみる庶民の信仰」

当館学芸員 滝沢幸恵

2月18日(日) 午後2時～3時

「北摂の酒米 - 三島雄町 - 」

当館学芸員 藤井裕之

3月18日(日) 午後2時～3時

「絵馬と人々のいのり」

当館学芸員 池田直子

歴史講座・博物館トークはいずれも申し込み不要。

博物館講座室。定員120名。先着順。当日直接会場へ。

交通案内

- JR岸辺駅下車徒歩25分
- JR吹田駅・阪急吹田駅から
桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆきバス「佐井寺北」
下車徒歩10分
千里中央ゆき、阪急山田ゆきバス「岸部」下車徒歩10分
- JR吹田北口から
五月が丘南ゆきバス「五月が丘西」下車徒歩7分
- 阪急南千里駅から
JR吹田ゆきバス、系統「佐井寺北」下車徒歩10分
- 車でのご来館は五月が丘・佐井寺方面からお願いします。

● 開館時間
午前9時30分～午後5時
● 休館日
月曜日、祝日の翌日
12月29日～1月3日
<http://www.suita.ed.jp/hak/>

吹田市立博物館だより 第28号
平成18年(2006)9月15日発行
吹田市立博物館
〒564-0001
吹田市岸部北4丁目10番1号
TEL.06(6338)5500
FAX.06(6338)9886

この冊子は、4,000部作成し1部あたりの単価は45円です。

R100

古紙配合率100%再生紙を利用しています。
限りある資源を大切にしましょう。